

「つながり」をあきらめない —若者たちと協同労働—

本号の特集テーマは、「『つながり』をあきらめない —若者たちと協同労働—」である。ワーカーズコープの現場の特徴は、困難のある若者を仲間として受け止め、一緒に働いたり、活動することである。ワーカーズコープで働く人たちが、どのように若者の困難を受け止める実践を創り出しているのかを、つながりをテーマに報告したい。

神戸川さんからは、ZOOMで行っているマンガサロンについて報告をいただいた。コロナ禍がきっかけとなり始まったマンガサロンは、センター事業団で働く全国のマンガ好きな仲間が集う、ゆるやかな居場所である。同じ事業所で働いているわけではないが、同じ組織に所属しているからこそ話せる悩みや葛藤を共有し、アドバイスを伝え合う場面がある。それが組織を辞めない関わりにもつながっていることが報告された。

まもなく16年目を迎える「せたがやサポステ」には、相談に来た一人ひとりが持っている力を発揮できるよう、多彩なプログラムが用意されている。1人の利用者Aさんの言葉をきっかけに、新宿にあるシェアキッチンで行ったカフェプロジェクトは、支援者である所長の八田さん自身にも変化をもたらすものであった。「彼ららしさ」を失わない支援のあり方を、ワーカーズコープの資源を活用することによって行った実践である。

古賀さんは、自身の子どもの不登校の経験が、職場内の親の会の取り組みに発展していった経緯を報告している。親の会「リゾームスクール」が発足されたことで、同じ悩みをもつ全国の組合員がリアルとオンラインでつながった。この活動が典型事例となり、現在では、長野県上田市、宮城県仙台市でもリゾームスクールが発足するという広がりを見せている。

岩手県北上市にあるワラタネスクエアは、ひきこもり地域支援センター事業を市より受託し、常設の居場所事業を中心に行っている。所長の後藤さんは、不登校・ひきこもりの家族の当事者として、北上市で居場所事業を行うために奔走した。仕事を辞めて居場所活動に取り組み、その過程で多くの人たちとつながりをつくっていき、ついに活動は事業となった。しかし、雇用される立場に限界を感じ、協同労働を行うセンター事業団に合流し、これまで培ったつながる力を存分に発揮し、4月からは隣の奥州市でも現場が広がっていることが報告された。

ワーカーズコープの働き方が生み出す、つながりを資源とする力を感じていただきたい。